

としよかんぽう



38

Tōhoku Fukushi University Library News

「仕方がない」から「仕方がある」へ

総合福祉学部福祉行政学科
准教授 村山くみ

8050問題、老老介護、孤独死、ゴミ屋敷、ヤングケアラー、ダブルケア、ひきこもり、不登校、虐待、ニートなど生活課題をあげればきりが無い。子どもの「7人に1人」が相対的貧困状態にあるとの報道を目にすれば“大変だ”“何とかならないのか”と思う人は少なくない。しかし、その“大変だ”“何とならないのか”との思いを行動に移すのは決して容易なことではない。正に、「言うは易く行うは難し」である。

子どもの貧困のような社会的な問題に限らず、“何とかならないのか”“こんなおかしい”と首をかじげたくなることは、大なり小なり日常のあらゆるところに存在する。先日もある町内会で会長のなり手がいないと町内会の休会が決まった。地域住民にとって町内会の休会は安心・安全な生活を脅かす一大事である。これまで町内会が管理してきた集会場はその日を境に使用できなくなり、集会場を会場に実施してきた地域サロンや趣味のサークルは活動を休止せざるを得なくなった。コロナ禍でも途切れることなく続いてきた住民同士の交流が町内会の休会を機にある日突然失われることになったのだ。

町内会長を引き受けられる人がいないのだから「仕方がない」、集会所の使用にはルールがあるのだから「仕方がない」・・・本当に仕方がないことなのだろうか。

本書は、「変えられない、仕方がない」を「仕方がある」にする方法(コミュニティ・オーガナイズing)を実践的に学ぶための指南書である。コミュニティ・オーガナイズingとは、仲間を集め、その輪を広げ、多くの人々がともに行動することで社会変化を起こすことであり、その方法である。本書の特徴は、コミュニティ・オーガナイズingの 5 つのステップをストーリー形式で学んでいく点にある。

ストーリーの主人公は、小学校5年生の女の子、カナメ。新しく着任した教頭先生の「昼休みの時間を、全員が読書をする時間にします」との宣言をきっかけに自由な昼休みを奪われたところから物語はスタートする。自由な昼休み奪還へ向けて、カナメと仲間たちが挑む冒険の物語には、コミュニティ・オーガナイズの魅力と進め方が丁寧に記されており、最後まで飽きることなく読み進めることができる。カナメたちのチャレンジを応援しながらページを夢中でめくり続けるうちに、自分にも何かできるのではという気になってくる。

第8章「身近なことから変化を起こす」では、岩手県胆沢郡金ケ崎町の若者たちが、これまで夏に開催されてきた成人式を冬に開催するべく奮闘する姿や、弱く守られる存在と考えられていた母親たちが立ち上がり、力を合わせ岩手県初の産後ケア施設を開設させる事例などが紹介されており、自分にも何かできるのではという思いを後押ししてくれる。

冒頭で述べたように現代社会には解決すべき生活課題が山積している。アクションを起こすことは難しい。けれど、何もしなければ変化は起こらない。課題の大きさに圧倒され、「変えられない、仕方がない」とあきらめそうになったとき、ぜひ手に取って欲しい1冊である。



『コミュニティ・オーガナイズ ほしい未来をみんなで創る5つのステップ』
鎌田華乃子
英治出版 2020.11

東北福祉大学図書館にもあります！
教員推薦図書コーナー
高橋誠一先生推薦です。
(資料番号 0000258424)



自明の理を問う

総合福祉学部 社会福祉学科
准教授 元村智明

日本語の「パン」を意味するブレッド(英語)、パン(仏語)、ブロード(独語)には、「超え難い意味的な差異がある」(青木保著『異文化理解』岩波書店、(岩波新書)2001)と指摘されたことがある。日本独自の「汁るそば」である「ラーメン」も同様に「中華そば」と呼ばれることもあるが、中国由来の「拉麺」や「老麺」との差異や誕生の時代背景の違いもある。

身近なものであり、誰もが知っているものであるにもかかわらず、そのことが何かを十分に知らないままにしていることが、身の回りには数多く存在しているのではないだろうか。

そのものを自明とせず「自明の理を問う」ことの意味は重要ではなかろうかと考える。

「社会福祉」も同様であり、「社会福祉」の用語には「福祉」との決定的な差異がある。それは、漢字文化圏で用いられる「福祉」の漢字は、紀元前に成立する「賜我福祉、壽算無極」(『易林』)で用いられるが、それと戦後日本の「社会福祉」が用いられた時代は全く異なり「福祉」と「社会福祉」を同一視できない。むしろ「福祉」に「社会」が追加されることの意味を考える必要がある。まして「福祉」や「社会福祉」は、英語の“welfare”(14世紀)や独語の“Wohlfahrt”(16世紀)とも同等ではないのではなかろうか。

さて21世紀社会に続く近現代社会は、人々にとり「自由社会」であると考えられる必要がある。それは前近代社会から比べて、一人ひとりが人生の主人公となり、自由意志のもとに自己選択と自己決定が重視される社会であり、人々にとり自由と引き換えに自己責任を背負う社会となったことを意味する。

他方で、人類の誕生と共に、人々は妊娠、出産、子育て、疾病、障がい、加齢を伴いながら歩み、また自由社会では雇用関係の成立から退職や失業と自らに迫る様々な状況が加わり、時折、飢饉や災禍にみまわれながら人生を歩んでいる。

そして人の一生の歩みのなかで、必ずしも自らの力だけでは生活困難や生活不安の回避や解決は十分にできないこともある。そのため自由社会である近現代社会には、国家の役割や機能を必要とするが、そこには「社会の発見」（「社会政策序論」：福田徳三著『社会政策と階級闘争』大倉書店、1992所収）が必要不可欠で、労働権と生存権を含む社会権の議論が重要であり「個人」と「国家」に対しての「社会」の発見には重要な意味があると指摘できる（元村 2016¹）。

そのうえで人々にとり「福祉とは何か」、「社会福祉とは何か」、なぜそれが必要なのか、その両者の差異とは何かの「基本的な問い」が必要不可欠である。

さらに、国家の役割や機能を議論する場合には、近代社会と現代社会の相違も意識する必要があり近代国家と現代国家も異なるが、そこには「中央」に対する「地方」、または「地域」が有する地域事情や地域課題への「問いの立て方」が重要である。

社会福祉の歴史研究では、長谷川匡俊を研究代表とする「地域における社会福祉形成史の総合的研究」（科学研究費補助金（基盤研究（3））研究成果報告書：平成15年度～平成17年度）で通史に対して地域社会から社会福祉の形成を問い直す試みがなされた。また、近現代日本の「慈善事業」や「社会事業」の具体的展開が自明ではなく、地域差があり同一視できないものとして共同研究が取り組まれ、その成果は池本美和子編著『近代日本の慈善事業』2006年、元村智明編著『日本の社会事業』2010年、杉山博昭研究代表者『戦前期における社会事業の展開』2015年、今井小の実研究代表者『戦前社会事業の到達点と現在への視座』2022年と問い続けられている。²

なお、ここに注目したい研究成果をひとつ紹介しておきたい。それは、100周年を迎える東北大学日本史研究室の創立記念事業の企画であり、半世紀の研究総括としての東北大学日本史研究室編『東北史講義』の「古代・中世篇」と「近世・近現代篇」（いずれも筑摩書房（ちくま新書）、2023）である。後著では、「東北」が幕末から近代において作られた言葉であり、「東北」が「地方としての一体性を強調するような現象が発生していくのは、主に近代以降のこと」と指摘したうえで、「例えば「後進」や「周辺」としての意味が込められている場合がある」と述べられている（後著「はじめに」）。それは、明らかに「中央」に対する「地方」の位置付けへの問いかけにほかならない。

これまで社会福祉の歴史研究は、歴史学の研究成果に学びながら、また隣接領域の歴史研究の成果に刺激を受け、他方でその個人の生活への国家的介入や社会的関与を独自に歴史分析してきた。それは社会事業史学会の創立 50 周年を記念したシリーズ「戦後社会福祉の歴史研究と方法－継承・展開・創造」(近現代資料刊行会、2022)、第一巻『思想・海外』、第二巻『理論・総括』として公刊された。

しかしながら、社会福祉の歴史研究とその成果は、まだまだ道半ばであると指摘できる。それは、未だ十分に議論され取り上げられていない東北地域の歴史事象がある。例えば、三陸大津波(1896 年・1933 年)や東北凶作(1905 年・1934 年)と生活支援の問題であり、また戦後社会の宮城・仙台圏域で取り組まれた「生活圏拡張運動」である。その意味でも、東北地域から社会福祉の必要性を考える歴史研究の拡がりと言えらる。

かつて J.S.ミルは、1867 年 2 月 1 日のセント・アンドルーズ大学名誉学長就任講演において大学で行われる歴史研究の真の目的について言及し、「事実のもつ意味」を教える重要性について「学生が歴史から、時代や場所による人間、あるいは社会制度の主な相違点を探し出すように仕向けることであり、人類の発達さまざまな段階での生活の営みや生活をどう考えたかを想像し、時代時代を通じて変わらぬものと進歩するものとを区別して、進歩の要因と法則について考え始めるようにさせること」(J.S.ミル著、竹内一誠訳『大学教育について』岩波書店(岩波新書)、2011)と述べている。

その J.S.ミルは、「自由」と「福祉」の関係を論じたが、そのことはあらためて講義のなかで取り上げることとしたい。

【注】

1 元村智明(2016)。「福田徳三の議論形成にみる社会福祉の基本的視点の検討―関東大震災戦後に着目して」『感性福祉研究所年報』17 号、pp.169-186.

2 いずれも社会福祉形成史研究会出版

目録業界の動向

さて何からお話すればいいでしょうか。そもそもみなさん、図書館員がカウンター以外で何をしているかを考えたことはありますか？めちゃくちゃ色々なことをしています。“目録”と呼ばれる作業もその一つです。簡単に言えば、書誌情報(図書のデータ)を作ることなのですが、そもそもみなさん、OPACで検索した時になぜ該当の図書がヒットするかを考えたことはありますか？それは、我々図書館員が1冊1冊書名や著者名や出版年やISBNといった書誌情報を入力しているからなのです。昨年度の本学図書館の受入数は約7000冊=7000件のデータを作成したということです。しかし、これを全てイチから作成したわけではありません。企業や他の図書館が作成したデータを流用して作ることの方が多いのです。

と、なると、共通のルールが必要になってくるという話になるのですが、日本ではそれが『日本目録規則2018年版』(以下 NCR2018)です。772ページあります。このNCR2018は、2010年に刊行されたRDAという海外で広く適用されている目録規則を参考に作られています。そしてこのRDAは1998年に刊行された「Functional Requirements for Bibliographic Records」(以下FRBR)という報告の考え方を基盤としています。このFRBRは、実態関連モデルでして……、もう字数の都合で結論を言ってしまうと、目録業界は現在、激動の時代となっております。インターネットの爆速的な発達により資料の検索がパソコンやスマホで全世界からできるようになりました。さらに日々の膨大な出版数、そして“図書”だけでなく多種多様な形態となった資料。それらを鑑み、協力・共有を拡大させ効率よくデータを作成し、いかに世界中にそれを流通させるか、そして目録の知識のない人が簡単に目的の情報を発見できるようにするにはどうしたらいいか、これらを米国議会図書館がリードし研究者や図書館員、Googleの役員やWorld Wide Web Consortiumのグループなど情報分野の専門家をもワーキンググループに交え検討を繰り返しています。

そして、日本の大学図書館員にとって最重要なのが加盟する国立情報学研究所のNACSIS-CATの今後です。NACSIS-CATは現在NCR1987年版改訂3版(2006年刊)を適用しています。そう、NCR2018ではないのです。もう字数がいっぱいなので、ここまでです。またどこかでお会いしましょう。

図書館 堀慧子



第4回

おとなのたしなみ 大人の嗜み

だいじえすと版

はてさて 我々、広報ワーキンググループ、実は全員4月生まれでして、先日みな誕生日を迎えました。まあ、歳はバラバラなのですが、当然立派な大人でござい……

大人か??

ガチャガチャではしゃいで、図書館の裏の木の葉っぱ採って、30日も絵を描いて、コンビニスイーツ食べてて立派な大人といえるのだろうか。



コイケ

どうすれば“大人”と認定されるのでしょうか。



金ちゃん

「大人っぽ〜い」って言われたいですね。



子金治

こないだ滝を見てきたよ。



大人っぽ〜いっ!!!



ともピ

滝ってよく観光地になってますよね。



滝って何を見るんですか？
高低差？水量？



マイナスイオンとか？



いや、よくわからなかった。



わかる〜。滝のよさ、わからないのわかる〜。



滝のよさは難しいね。一緒に行った父はわかってたっばい。



滝がわかるって相当なツウですよ。



夏に家族で滝に行ったことがありますけど「滝なら涼しそう」って理由でしたもん。



滝愛好家は滝の何を愛でているんでしょうね。



ちょっと、滝はハードルが高いなあ。



あと、あれ、菊人形も難しい。菊の花の品評会とかならわかるけど、なんで人形にするの？



私も一回見たことありますけど、わからなかったです。



いやでも、滝と菊人形はちょっと大人っぽ過ぎませんか？私たち初心者ですよ？



私、一人でバーに行くっていうのをやってみたいんですよ。



めっちゃ、わかる〜〜。



大学生くらいの時、正に“大人っぽい”と思って、それやりました。



初々しい！



私、28歳の時に母とバーに行ったら未成年だと思われて入店拒否されました。

なんとということでした。

Webにつづく

つてすること、すでにい
ないという意、でし
し、そうやって拙道に大人へ



目録業界の現状

またお会いしましたね。先ほど、NACSIS-CAT のところで話が終わってしまいました。NACSIS-CAT というのは、日本の大学図書館が協力することで運営されている書誌情報のデータベースです。当館も参加しています。このデータベース、参加している大学図書館または機関が書誌情報を登録すれば他の参加館はそれを利用して作業することができます。この“どこかの機関”には企業や国立国会図書館(NDL)などが含まれます。そしてこれらの機関は前述の NCR2018に則ってデータを作成していますので、NCR1987年版改訂3版を適用している NACSIS-CAT(=国内の大学図書館)とは記述の規則が異なります。ちなみに、NCR2018も絶対的な規則というわけではありません。本則の他に別法があり機関によってどちらを選択するか分かりますし、オリジナルのルールを設けているところもあるでしょう。つまりNCR を参考にそれぞれの機関で別途マニュアルを作っているということです。NACSIS-CAT ではそれが「目録情報の基準」と「コーディングマニュアル」であり、参加館の図書館員は普段そちらを参照し作業をしています。

異なる目録規則を適用しており、さらに準拠するマニュアルも違う場合、当然、作成される書誌情報には大なり小なり差異が生まれます。世界的な流れとしてはこの差異を“許容する”という方向にあります(NACSIS-CAT もそうです)が、現場で作業をする身としては、「それは検索に差し障るなあ」とか「前の巻と記述方法が違うなあ」とか「それをタイトルにし ma^ofu?:@@pq/a(# ° ∇)㍉ァ!!」と、いろいろ思うところがあり、修正作業も結構な手間となっているのが現状です。

書誌情報の「協力・共有」のため世界的にFRBRを基にした考えでデータを作成する流れとなりました。さらにもう一つ、「繋がり」が重要視されるようになりました。つまり「リンク」です。シリーズや、映画化、翻訳版といった関連情報のリンクがあれば便利ですね。NDL が提供する「国立国会図書館サーチ」で本を検索してみてください。右下の方に書店、SNS、書評サイト等のリンクがあることに気が付くかと思います。こういうのも利用者や出版業界への便益を考えてつけられたものです。さらに下の“書誌情報を DC-NDL (RDF)で出力”をクリックすると RDF での記述を見ることができます。RDFとはセマンティックウェブを実現するための構文です。DC というのはダブリンコアの……もうスペースがありません、またどこかで！

図書館 堀慧子

世の中に存在する文学賞は数知れず。芥川賞に直木賞、ノーベル文学賞やブッカー賞と様々である。そこで、私たちに身近な東北という地域に根差した文学賞を数回にわたり紹介しようと思う。

今回はその最終回である。

地域に根差したものは、それが食べ物であっても工芸品であっても、その土地の誇り、後世に伝承すべき尊いものである。それは文学賞もしかり、ということで「Café ろっけんしょう」のトリを飾るのは宮城県。さあどんな文学賞が次の世代に受け継がれていくのかワクワク、ドキドキ。

と調査を始めるも、宮城県には長い歴史をもつ文学賞は存在しないことが判明。ええ～、そんなバカな！仙台文学館初代館長の故井上ひさしさんもビックリ！（なはず…）

2017年に創設された「仙台短編文学賞」は、仙台・宮城・東北に何らかの関係がある短編小説であればジャンルも問わず、地域も問わず全国から募集できる文学賞である。2018年3月15日の「河北新報」には、記念すべき第1回目の大賞に輝いた岸ノ里玉夫さんの『奥州ゆきを抄』の全文が掲載されている。室町時代中期に生まれて各地で盛んに行なわれていた古浄瑠璃、奥州の仙台地方を中心に定着した「奥浄瑠璃」の演目の復活と阪神淡路大震災、東日本大震災とを絡めて描かれた物語である。

宮城！

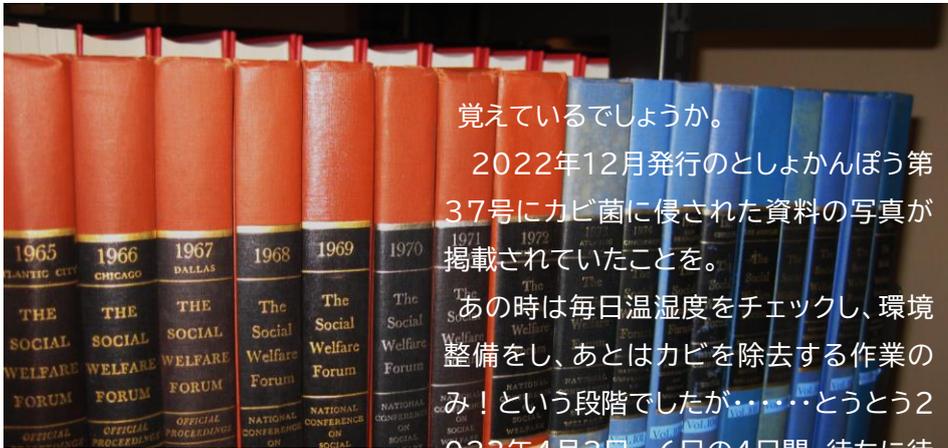


1946年(昭和21年)1月に、戦後東北初の総合文芸誌「東北文学」は創刊された。東北から新しい文学、文化を発信し、新人の発掘と育成がその目的だった。震災の後を生きる私たちにとって「仙台短編文学賞」創設の志は、戦後の荒廃していた時代に、文芸復興をいち早く掲げた先達たちのチャレンジ精神と根っこは一緒であると、そのホームページには書かれている。「言葉の力」を信じ、仙台から新しい文学を生み出していくという思いは繋がっている。

第7回目をむかえる「仙台短編文学賞」の選考委員は伊坂幸太郎である。この賞がこれから50年、100年と続く文学賞として根付くことは、震災の伝承という意味でも意義がある。‘O後’という苦い経験から発展的な未来へ、その松明を丁寧につないでいきたいと思う 今日この頃である。

図書館 八巻千穂





覚えているでしょうか。

2022年12月発行のとしよかんぽう第37号にカビ菌に侵された資料の写真が掲載されていたことを。

あの時は毎日温湿度をチェックし、環境整備をし、あとはカビを除去する作業のみ！という段階でしたが……とうとう2023年4月3日～6日の4日間、待ちに待った専門業者によるカビ除去作業が実施されました。

多くのカビ除去作業は人体にとって有毒な薬剤を使用する為、作業中は室内と室外の両方に気をくばらなければなりません。今回作業をして頂いた業者さんは人畜無害な特殊な薬剤を使用するとの事。それならば善は急げとばかりに作業をお願いし、入学式やオリエンテーションが重なる時期にもかかわらず実施可能となりました。



作業員の方々は、慣れた手つきで作業を進めてくださり、最終日にはほとんど作業が終わった状態。無残な姿になっていた資料や書架が生まれ変わり、洋雑誌書庫内は心なしか空気も浄化されたようでした。

しかしながら大事なのはここから。ふたたびカビが発生してしまったら元も子ありません。現在はサーキュレーターで室内の空気を循環させ、温湿度管理を行っています。洋雑誌書庫は図書館棟とは別棟にある故、どうしても目が届きにくくなってしまいますが、資料保存のためにはこまめな観察が必要であることや環境の大事さを再確認した一連の出来事でした。これからもカビとの静かな戦いは続きます。



表紙は座禅堂付近で撮った新緑の様子です。今号も、元村先生、村山先生のご寄稿により発行することができました。ありがとうございました。(図書館・菅原)

